

ほたるの里

「あ、光った。ここにもいるよ！」

日が暮れて、うす暗くなった水路のわきの草むらをゆびさしながら、小学生がはずんだ声で話しています。

「ほんとは。二ひきいるね。」

ならんで歩いていた友だちも足を止め、光っては消える小さな光を見つめました。ゆかは、ほたるまつりにやってきた子どもたちのそんな楽しそうすがたをながめるたびに、はじめてほたるを見たあの夜のできことを思い出すのです。

ゆかがほたると出会ったのは、一年生の時でした。夕食を食べた後、近所でおこなわれている「宮田のほたるまつり」へ行った時のことです。水路のわきの暗い遊歩道をゆかはお母さんと手をつないでゆっくりと歩いて行きました。その時、ゆかのすぐ目の前を小さなやさしい光が一つ、ふわりと流れていったのです。

「お母さん、今のがほたる？きれいだね・・・。」

ゆかはとんでいったほたるを見つけようとあたりを見回しました。

「さつきのほたる、どこへ行ったんだろう。」

水路わきの草むらをのぞきこんだゆかは、草かげにともったかすかな光を見つけました。すると、その近くでもう一つ、小さな光がともりました。光ってはきえる二つの光は、まるで、ないしよ話をしているように見えました。

「『こんばんは』ってあいさつしたのかな。」

ゆかはつぶやき、ほたるたちの光のないしよ話をじっと見つめていました。

夜の八時をすぎたころ、ゆかの目の前に思いがけないけしきが広がりました。たくさんのほたるがいっせいに光り始めたのです。光りながらとびかうほたるもいました。それはまるで、美しいドレスを着たほたるたちのダンスパーティーを見ているようでした。どれくらい時間がすぎたのでしょうか。ゆかはずっと動かずに、そのゆめのようなけしきを見つめていました。

あれから十一年がたち、高校三年生になったゆかは、今年もほたるまつりに来て、おきやくさんを案内する手つだいをしています。ほたるをはじめて見たあの日から「ほたるの里をまもる会」の会員となり、友だちといっしょに、おまつりの手つだいをしているのです。

ゆかは以前、ほたるの里をまもる会の方からこんな話を聞いたことがあります。

赤城町の宮田には、ちかくに利根川がながれ、むかしは小さな美しい川もたくさんながれていました。米作りのさかんな宮田では、田うえの季節になると、どこでもほたるを見ることができたそうです。しかし、四十年くらい前から、小川や農業用水路の岸は



水のながれをよくするためにコンクリートでかためられ、田畑には、米のしゅうかくを上げるために農薬がつかわれるようになりました。そのため、水辺にすむ生きものも、ほたるのえさとなるカワニナも数がへり、ほたるが美しく舞うむかしのような風景は消えていったのです。ゆかが生まれた十七年前ごろには、三、四ひきのほたるしか見られなくなっていました。

「宮田のほたるをなくしてはいけない。人と生きものがともに暮らすゆたかな土地をまもりたい。」そう考えた宮田の人たちは、まず、ほたるがどんな場所でのように育つのかをしらべ、学んだことを報告しました。また、ほたるがたくさんとんでいる土地へ見学に行つて、ほたるの里をまもるために、自分たちができることは何かを話し合いました。そして、ほたるを育てる水路に何度も足を運んでは、学んだことをもとに、みんなで力を合わせて働いたのです。

ほたるを育てるためには、ほたるの幼虫のえさとなるカワニナをたくさん育てなければなりません。ところが、カワニナを育てる養殖場としてえらんだ川は、夏でも水温がひくく、カワニナが思うように育ちませんでした。そこで、養殖場をべつの場所にうつし、カワニナの飼育を一からやりなおしたのです。台風や大雨で水路の水があふれ出し、ほたるの卵や幼虫がたくさんながされてしまったこともありました。会員になった子どもたちも、水路のゴミひろいやカワニナのえさやりなど、自分たちができる仕事をいっしょうけんめいにおこないました。「ほたるの里」の案内板や「ポイすて禁止」の看板もおとなたちといっしょに心をこめて作ったそうです。



宮田の人たちがほたるをまもる活動をはじめ十六年たった今年、六百ひきものほたるが宮田の里を美しく輝かせています。そのたくさんの光を、ゆかは今夜もしずかに見つめます。耳をすますと、ほたるたちの光のおしやべりが聞こえてきました。やさしい光で話しかけてくる、ほたるたちの声をこれからもずっと聞き続けたいとゆかは思っています。



と三原田歌舞伎を守り伝える地域のおとなたち

年 組 ()

平成13年の公演では、1,500人の地域の人たちが半年がかりで舞台づくりをおこないました。わたしは、畳4枚分の大きな紙に背景の絵(遠見絵)を描いたり、舞台を動かす80人に拍子木で合図を出したりしました。歌舞伎を見たお客さんが「感動した」とよるこんでくれることが何よりもうれしいです。私たちの誇りである上三原田の歌舞伎舞台を地域の人たちの力で守り伝えていくことが大切です。



須藤 明義さん
舞台操作 伝承委員会 委員長

公演の時は、屋根裏でせりの上げ下げを行いました。せりを動かす速さや縄のまき方など、舞台操作の様々なことは年上の方から教えていただき、若い人に伝えていきます。舞台の修理が終わったら、また公演が行われるかもしれません。その時は三原田小のみなさんも舞台上に上がったり、せりに乗ったりして、歌舞伎舞台にふれてみてください。



都丸 勉さん
舞台操作 伝承委員
永井長治郎のご親戚

義太夫は、語りで役者のセリフとセリフをつなぎ、物語を盛り上げる役目です。いろいろな登場人物になりきって、気持ちが変わるように語り方を変え、物語を進めていくところが義太夫の楽しさであり、難しさでもあります。皆さんも歌舞伎を見たり聞いたりして、そのよさを味わってみてください。



関口 勝彦さん
舞台操作 伝承委員・義太夫

星野 敬太郎さん
舞台操作 伝承委員会 事務局



平成7年(17年前)、18年ぶりに歌舞伎舞台での公演を復活させるため「舞台操作伝承委員会」をつくりました。委員会のメンバーは日に日に増え、上三原田に住むすべての家庭が加わってくることになりました。それは、昔から受け継がれてきた、このすばらしい歌舞伎舞台をこれからも守り伝えていかなければならないという思いがあったからです。

高橋 国良さん
舞台の修復工事 担当



歌舞伎舞台をつくり上げた永井長治郎は、一本一本の木の曲がりぐあいや堅さなどを調べて、その木が舞台のどの部分の材料として使えるか考え、舞台を組み立てたようです。工事をしてみると、こまかいところまで工夫をこらした舞台のすばらしさや永井長治郎の腕のよさにあらためて感心します。小学生のみなさんにも、このみごとな歌舞伎舞台に興味をもってもらいたいです。

藤川 栄さん
古典芸能部の歌舞伎の先生



5さいから歌舞伎を始めました。歌舞伎の楽しさは、お姫さまや殿さま、盗賊、老人、子どもなどのいろいろな役になりきって演技ができることです。また、おきやくさまから拍手やおほめの言葉をいただいた時はとてもうれしい気持ちになります。人とのつながりや礼儀の大切さも歌舞伎から学びました。

ひいおじいちゃんのお杉の木

「こうすけ、早くおふろあらってちょうだい。」
お母さんが台所から声をかけました。

「えー、今、いいところなんだよ、このゲーム・・・。」

「おふろあらいは、こうすけの仕事でしょ。」

お手つだいをしようとしないうこうすけをひいおじいちゃんは庭からそつと見ていました。

「こうすけ、ちよつとおいで。」

ひいおじいちゃんはこうすけを庭によび出し、家の後ろに立っている大きな杉の木を指さして言いました。

「あの杉の木はな、ひいおじいちゃんがこうすけと同じ小学三年生の時に家族みんなで植えたものなんだ。強い風から家を守ってもらうためにな。植えた時はこうすけがまたげるぐらいの小さな苗だったよ。でも、七十七年たってこんな立派な木になり、ちゃんと家を守ってくれている。」

それから、ひいおじいちゃんはこうすけをとなりに座らせ、こんな話をしてくれたのです。

八十年前、ここは、たくさんのお杉の木々がおいしげる森だった。その森の木々を一本一本切りました、畑を作った人たちがいるんだよ。開拓者と呼ばれたその人たちは、今から七十七年前の昭和十年にこの赤城町栄にやってきたんだ。ひいおじいちゃんのお父さんとお母さんもひいおじいちゃんをつれて移り住んだんだよ。ひいおじいちゃんが小学二年生のときのことだった。

そのころはまだ、ブルドーザーなどの機械はなかったから、人の力だけで森を切り開いたんだよ。木を切るのも、切りかぶをぬくのも、畑をたがやすのもすべて手作業だった。とくに、太いのこぎりでも一本一本切りました、残った切りかぶをぬくのはたいへんな作業だったんだ。来る日も来る日もそんな仕事を続けていたおとなたちは、手がいびれて、箸がもてなくなってしまうほどだった。月夜の晩には、子どもを寝かしつけてから、月明かりの下で働く人もいた。小さかったひいおじいちゃんも、切りかぶや小石をかたづけける仕事をよく手つだったよ。さいしよのうちは作物がよく実らなくてね。だから、やっとの思いで収穫して、家族みんなで食べたおいしいものは、今でも忘れられないよ。

そのころ、村には電気がなかったから、どの家もランプで生活していたのさ。ランプはすぐにすすで黒くなってしまふんだ。小さい手じゃないとランプの内がわがふけないから、すすをふくのも子どもたちの仕事だった。うす暗い明かりの下で針仕事をするお母さんは、ランプをきれいにみぐくと、とてもよろこんでくれたよ。



栄はむかしから水の少ない土地だった。だから、飲み水やふるの水は一キロメートルもはなれた沢まで毎日くみに行かなければならなかったんだ。ひいおじいちゃんは毎朝、かばんに空の一瓶を二本入れて小学校へ通い、帰りに沢の水をくんで家にもち帰ったものさ。だいじなだいじな水の重さをずつしりと背中に感じながらね。

そのうち、近所の人たちと井戸をほることになり、おとなたちは つるはしでかたい土や岩を二十メートル以上もほる作業をしたんだ。だから、つるはしの先がすぐにだめになってしまった。そんな時は、つるはしをせおって学校へ行き、帰りに四キロメートル下った下郷の鍛冶屋さんまであずけに行くんだよ。そして、家まで八キロメートルの長い坂道を歩いて帰ったんだ。直してもらったつるはしを家にもち帰る日は、その坂道が何倍も長く感じたなあ。泣きたくなる時もあったけど、歯をくいしばって歩いたよ。しばらくして井戸水が出るようになり、家族は、おいしい水をいつでも使えるようになったんだ。

ひいおじいちゃんの話聞き終えたこうすけは、少しうつむいた後、ひいおじいちゃんが植えた杉の木を見上げました。夕やけの空に枝を広げ、どつしりと立っている杉の木を見つめながらこうすけは、お母さんの言葉を思い出していました。

